第２０回 福岡県美しいまちづくり建築賞　受賞作品

美しいまちづくり建築賞　大賞受賞作品

作品名 須崎の長屋

建築主 花田武

設計者 (株)松山建築設計室

施工者 (株)安成工務店

美しいまちづくり建築賞　優秀賞受賞作品

作品名 柿林の家･池田邸

建築主 池田紘一

設計者 九州大学大学院人間環境学研究院教授　竹下輝和
(株)ＴＡＣ環境デザイン

施工者 アサヒ工務店(株)

作品名 戸畑Ｃ街区整備事業

建築主 北九州市
新日本ホームズ(株)

設計者 隈研吾建築都市設計事務所
竹中工務店九州一級建築士事務所

施工者 (株)竹中工務店九州支店

作品名 福岡県醤油会館

建築主 福岡県醤油醸造協同組合

設計者 柳瀬真澄建築設計工房

施工者 (株)竹中工務店九州支店

財団法人福岡県建築住宅センター奨励賞

作品名　いのちのたび博物館（北九州市立自然史・歴史博物館）

建築主　北九州市

設計者　(株)久米設計

施工者　熊谷・新日鐵・山九共同企業体
　　エルゴテック・協和・佐野共同企業体
　　日鉄・淵脇・中川共同企業体

第 20 回福岡県美しいまちづくり建築賞総評

第 20 回を記念する「福岡県美しいまちづくり建築賞」は、住宅建築の部 36 作品、一般建築の部 30 作品、合計 66 作品の応募作品がありました。この賞の目的は、美しい景観の創造に寄与するとともに建築計画において優れた建築物を奨励し表彰することにあります。

本年度の応募作品の多くからは、景観や省エネ、健康、福祉、高齢化など「環境の社会」を正面から受け止めた建築計画を感じ取ることができました。結果的ですが、現地審査を通じて各賞に絞り込んだ作品はみな共通して、美しい景観の創造とともに、地域の歴史性や伝統文化の継承を建築に組み込んでいることも印象に残ります。

「須崎の長屋」は、近世博多の町割りの様相を残す間口 2 間、奥行き 11 間程の狭小敷地に、3 世代の家族が住み続けることを解決した秀作です。この作品が提案する低層高密度の町家型デザインは、歴史的景観が残る都市における現代住宅のあり方に大きな示唆を与えています。「柿林の家・池田邸」では、伝統的な木造在来工法を生かしながら、無垢のスギ間伐材をパネル化して用いる新機軸工法の棲家を創っています。

「戸畑 C 街区整備事業」では、戸畑の夏を彩る伝統的な祭・祇園山笠を観覧する客席を都市景観の装置として仕掛ける提案が見られます。「福岡県醤油会館」では醤油づくりの伝統を受け継ぎ育てるための地域的役割が建築に担われています。「いのちのたび博物館」は、文字どおり「いのちあるものの歴史」を展示する作品で、旧八幡製鉄所の解体溶鉱炉のレンガを使用するなど、敷地環境の歴史性も積極的に活用しています。

美しいまちづくり建築賞

美しいまちづくり
建築賞
大賞

須崎の長屋

建築主：花田武
設計者：(株)松山建築設計室
施工者：(株)安成工務店

設計趣旨	講　評
須崎地区は、近世博多の町割りに端を発し、古くから船溜まり（現博多中学校）として海産物問屋や船問屋など数多くの商家が狭小な土地に軒を連ねていた風情の残る地域である。このプロジェクトは近年、都市開発が進み、周辺の街並みも変化しつつある中に間口 3M、奥行き 20Mという昔ながらの町屋のスケールが今もなお存在するこの土地に住むことを願った大家族のための住宅である。最大限ではなく最小限という指向でつくったこの住宅は緻密なスケールで	近世博多の町割りの様相を残す間口 2 間、奥行き 11 間程の狭小敷地に 3 世代 7 人家族が住み続けることを解決したデザインは、これからの都市市街地での高密度住居のあり方に大きな示唆を与えている。これまで、都市部の歴史的な地籍は開発の波に飲み込まれ、本来の人間らしい尺度のまちづくりを見失いがちであった。この町家型住宅は、博多の町家の歴史を引き継ぎ、都市に住み続けていきたいという建て主の意志と希望が簡潔な形となって現れている。3

各部屋の設定がなされており、各室の機能は維持しながらも大家族のふれあいが容易にできるプログラムになっている。須崎の長屋は、博多に多く点在する狭小地の再生手段として可能性を求めたプロジェクトであった。	層に重ねられた 3M 間口の奥深い空間の中心に軽快で透明感のある階段が配されており、すべての空間が連続しつつプライバシーが緩やかに確保される日本の伝統的な町家らしさを感じる。採光や通風のために設けたデッキの造りにも町家固有の坪庭の知恵が生きている。隣地が駐車場化されているため、昼間のファサードは孤立して見えるが、一転して夜景では町家の柔らかな明かりが街路にもれる。この小住宅の佇まいに範を得て、歴史的な地籍を尊重した街区の景観が再び整えられていくことに期待したい。

美しいまちづくり
建築賞
優秀賞

柿林の家・池田邸

建築主：池田紘一
設計者：竹下輝和
(株)ＴＡＣ環境デザイン
施工者：アサヒ工務店(株)

設計趣旨	講　評
現役を退職した研究者ご夫婦の、第 2 の人生のための棲家。耳納連山麓の柿畑の一画に、1 万 5 千冊以上の書籍に囲まれた静かな執筆環境と、地域の方々との交流を意図した住まい。延床 50 坪で、木材	耳納連山をあおぎ見る風景と自然環境にめぐまれた、夫婦ふたりの終の棲家という設定に共感する。「ひろま」や「通り土間」、「いま」、「にわ」など、空間に名付けられた呼称からもこの家のこれからのライフス

量 87㎥（通常の約 6 倍）という「本格的な素材型住宅」で、杉の間伐材（乾燥材）を用いて、外壁（120mm 柱材）、内壁（105mm 柱材）をパネル化し、欧米型ログハウス（横架材方式）とは異なり、ログシステムを在来軸組みに統合した独自の「縦ログハウス構法」を用いた。この結果、我が国特有の伝統的な住まいの開放性を確保するとともに、板材も厚材（42mm）に統一して仕上げ工事を極力限定化することで、コストパフォーマンスに成功した。	タイルのありようが伝わってくる。伝統的な在来の軸組工法に加えて、床、壁、天井に無垢のスギ間伐材を用いたパネルを挿入することによって、「大壁」でも「真壁」でもない新機軸の工法を打ち出した家づくりとなっている。こうして無垢材で家を包み込むことによって、健康的な断熱性能も期待できよう。外壁の赤ベンガラと黒ベンガラも日本の伝統的木造の色彩を彷彿とさせている。また、現役を退職した夫婦が引き続き研究に没頭するための膨大な図書が並ぶ書斎のデザインも棲家にふさわしく魅力的である。柿林に囲まれた「にわ」の草花と用水も風景に溶け込んだ和みとなっている。建て主と設計者が理解しあって造りあげた独自の思い入れがにじみ出る秀作である。

美しいまちづくり
建築賞
優秀賞

戸畑 C 街区整備事業

建築主：北九州市
新日本ホームズ(株)
設計者：隈研吾建築都市設計事務所
竹中工務店九州一級建築士事務所
施工者：(株)竹中工務店九州支店

設計趣旨	講　評
戸畑区役所、保育所、障害者地域活動センター、	公共の施設と民間の居住施設が複合したきわめて

公社賃貸住宅、民間分譲住宅で構成される街区の一体開発である。多種多様な施設の中央に「ふれあいの丘」と呼ばれる大規模屋上緑化を施した屋外空間を配し、多様な世代間交流の発生を促す配置計画を行った。階段状のルーバーを持つ区役所正面ファサードは、室内執務環境への採光と室内からの視認性を確保しつつ、観覧席としても機能するよう計画している。国の重要無形文化財である戸畑祇園山笠開催時には、このスペースが 2000 席の桟敷として使用され、その他イベント催事にも対応できることを目指した。丘から立上がる建物群が、有機的な形態とアースカラーのグラデーショナルな色彩計画によりまちなみとの一体感を高め、環境首都を目指す北九州市のシンボルとなることを意図した。	新鮮な手法のまちづくりプロジェクトである。複数の高齢者向施設も含まれている。各施設の中心に配された屋上緑化公園の「ふれあいの丘」には、市役所の屋根の一部となっている階段を登る。この階段は、戸畑の夏を彩る祇園山笠を観覧する客席ともなる。浅生 1 号公園から階段を通じて丘に至るおおらかな風景は、これまでの都市の景観には見られないスケールの大きさと市民の行き交いを眺める仕掛けの新しさがある。また環境負荷低減のために、緑化、太陽光発電、再生木材の使用、雨水のトイレ洗浄水利用、氷蓄熱、照明照度制御など、多様な建築環境技術を一体のプロジェクトとして意欲的に取り扱っている。戸畑地区のイメージカラーから導き出したという土と緑の基調色を配した各棟の外観は、光線の具合で刻々変化する色彩景観を創り出している。駐車場を施設内部に取り込んで外観に露出させない計画も望ましい都市景観への配慮となっている。

美しいまちづくり
建築賞
優秀賞

福岡県醤油会館

建築主：福岡県醤油醸造協同組合
設計者：柳瀬真澄建築設計工房
施工者：(株)竹中工務店九州支店

設計趣旨	講　評
この建物は、長い歴史によって培われた「伝統」を受け継ぎ、未来に向けた「新しい」まなざしを育てる場であることが求められた。そのことをまず木構造として表現した。伝統的な木の優しい素材感と、集成材と鉄筋を用いたラーメン工法による合理的な新しさである。外部は立体的に交差する 2 つのボリュームと建物を貫く板壁によって構成される。事務室研究室ゾーンは「縁」をイメージした明るく活気的な「新しさ」を、2 階建て部分は「蔵」をイメージした静かで内省的な「伝統」を象徴している。 木構造を直截に表す均等な架構はシンプルな構成でありながらも、力強く豊かな表情を持つ。少ない部材種、単純な工法、軽量化によりローコスト、短工期を図った。	醤油醸造の長い歴史と伝統を未来にむけて育てることを目的に建てられた建築で、集成材大断面柱梁の構成が端正である。そのため空間の全体としては凡庸に見えるが、ローコストでの計画を考えれば秀作であり良好な建築環境を創っている。露出された集成材は鉄筋を用いたラーメン工法で整然と架構され、単純ではあるが合理的な確かさを感じる。採光のためにつけられた高窓からの光が柔らかく、梁を照らす照明のあかりもオフィスの雰囲気を心地よくしている。道路に面する 50M ほどの低く長い外観は、深い庇ルーバーの光と影で強調されて軽やかに日照調整されている。交通量の多い幹線道路との境となる盛り上げられた傾斜のり面の植樹や、空調用の地中熱利用換気システムの導入なども、美しいまちづくりの要件である環境共生や省エネの配慮として評価できよう。夕方からは、照明に映し出された集成材の柱梁があかりの景観となり、地域の風景に安らぎを与えている。

福岡県
建築住宅センター
奨励賞

いのちのたび博物館

(北九州市立自然史・歴史博物館)

建築主：北九州市
設計者：(株)久米設計
施工者：熊谷・新日鐵・山九共同企業体
エルゴテック・協和・佐野共同企業体
日鉄・淵脇・中川共同企業体

設計趣旨	講　評
隣接地の商業施設と連携を念頭に、アミューズメント性をもった博物館とすることで、地域一体となった相乗効果による、集客力の高い博物館を実現した。すなわち、博物館はアースモールと命名した実物大の恐竜骨格標本展示室を軸に、各展示室をダイレクトに連結し、来館者が各自の志向に応じて自由に回遊できる、商業コンプレックス的な空間構成を構築し、従来の一筆書きの強制動線から脱却した。同時に展示はより肉薄できるよう、ケース等の保護から極力開放し、近づきさわり、感じることのできる展示手法を多く採用し迫力とリアリティを高めた。主たる来館者の子供たちが楽しみながら学べる「楽習」の実現を目指したアミューズメント博物館である。	旧八幡製鉄所第一高炉などの産業遺産に隣接する博物館計画を、アミューズメント性を打ち出して再訪性が期待できる施設にまとめあげている。地球の歴史と人類の歴史の多種多様な展示品をさまざまな視点や角度から立体的に鑑賞できるのは、次々と新しい興味を誘発して楽しい。展示ディスプレイも最新の技術を駆使して完成度が高く、また屋外テラスの草原ビオトープ展示も来館者を優しく迎えてくれる。ただ、文化楽習園の民家展示の手法はとてもユニークに見えたが、公園から眺める景観効果が弱かったことが惜しまれた。解体した溶鉱炉のレンガによる周辺舗装などは、地域の歴史とつながる素材の再利用として共感できる。開館当初から利用率が高く多くの市民に親しまれていることは、美しいまちづくりへの確かな貢献の証であろう。今後この施設が博物館群全体の拠点となって、館内のショップやレストラン、ライブラリーなど都市と直接関わりある施設がよりいっそう活用される新しい街並の創出を期待したい。